

資本の変容と「金融化」*

——清水真志の「貨幣資本家」再考論によせて——

江原 慶[†]

2018年12月22日

はじめに

本稿では、清水真志によって最近提起された新しい「貨幣資本家」論を批判的に検討することを通して、資本概念および資本主義における市場の変容に関して、原理的なアプローチを追究する。その「貨幣資本家」再考論は、『専修経済学論集』に3号にわたって分割掲載されている「貨幣資本家と資本」と題された論文(清水, 2016,17)に示されている。この論考は、その副題「今日の「金融化」を背景として」が示すように、「金融化」と総称される現代資本主義の現象を、原理論がどう映し出すのか、またそのためにはどのような再構築が必要なのか、といった問題意識を背景としている。従来の原理論は、こうした現象レベルの問題に対して、資本主義の基礎的な理論構造に影響を与えるものではないという基本スタンスで臨んできた。清水はそのような硬直的な態度をとらず、「金融化」現象を原理的な次元にまで抽象化して捉え、原理的な資本理論を再構築しようとしている。しかもその議論は、これまで「貨幣資本家」が論じられてきた利子論あるいは信用論の領域内部に止まることなく、原理論体系冒頭の流通論次元における資本概念をはじめとして、体系全体に及んでいる。こうした試みはマルクス経済学原理論研究の最先端をいくものであり、もっと多くの注目が集められてよい。

しかしこの清水の新しい「貨幣資本家」論には、原理論の観点からみて疑問に感じるところも少なくない。それは「金融化」現象のもつ資本主義の構造変化としてのインパクトを、十分に汲み取り得ないことにも繋がっているように思われる。本稿ではまず第1節にて、そうした疑問点を率直に提示してみたい。清水論文の論点は多岐にわたっているので、本稿の関心からみて必要と思われる箇所を選択的に取り上げる。その上で第2節では、そのような疑義が生じる理由を、流通論レベルにおける資本理論を中心に考えてみる。そこでは今世紀に入ってから本格的に議論されるようになった、資本の原理的な変容に関する理解を糺すことにする。最後に第3節にて、翻って本稿の立場では「金融化」現象がどう原理論から眺望され得るのか、「費用化」概念と市場の浸透力を再検討することを通して説明してみる。

* 2018年マルクス生誕200年記念国際シンポジウム報告／本研究はJSPS科研費18K01529の助成を受けている。

[†] 大分大学経済学部准教授